

概要

日時:2014年9月23日(火・祝) 13:00-16:00

場所:明日香村 祝戸荘 研修室

主催:奈良県立医科大学附属病院、国立がん研究センター がんサバイバーシップ支援研究部

後援:奈良県

定員:40名

対象:がん患者・がん医療にかかわる医師・看護師・がん相談員

参加費:無料

プログラム

13:00 主催者挨拶

長谷川正俊(奈良県立医科大学附属病院 放射線治療・核医学科 教授)

若尾文彦(国立がん研究センター がん対策情報センター長)

13:10-13:50 特別講演「がんと就労」

高橋都(国立がん研究センター がん対策情報センター がんサバイバーシップ支援研究部長)

13:50-14:20 語り 経験者の立場から

患者の立場から:Aさん 女性 40歳代

企業の立場から:川莖治(大和リース株式会社 支店長)

企業の立場から:西林康浩(奈良中央信用金庫 総務部次長)

医師の立場から:長谷川正俊

14:20-14:30 休憩

14:30-14:35 ワールドカフェ(交流会)の説明

四宮敏章(奈良県立医科大学附属病院 緩和ケアセンター長)

14:35-15:50 ワールドカフェ、まとめ

15:50-16:00 総括

高橋都

四宮敏章

報告

彼岸花が咲き乱れる秋の奈良…お天気も最高に良い9月23日(祝)に、歴史文化遺産の宝庫である国営飛鳥歴史公園内の「祝戸荘」で第3回ご当地カフェ「明日香カフェ」が開催されました。共催の奈良県立医科大学附属病院のスタッフのみなさまのご配慮とご尽力のおかげで準備万端です！



はじめに奈良県立医科大学附属病院放射線治療・核医学科 長谷川正俊教授からは「今日のカフェでは今後に向けた方向性について活発なご意見をいただければと思っています。」と挨拶がありました。



また、国立がん研究センターがん対策情報センター 若尾文彦センター長からは「がん患者は医療現場では「患者」ですが、家庭では「家庭人」、地域では「コミュニティの一員」、職場では「勤労者」であり、いろいろな場面を考えていく必要があります、お互いに情報共有してコミュニケーションを取っていかねばなりません。そのツールの一つとして、今日のような「カフェ」もあると思います。カフェですから、お茶を飲んで本当にフランクにみんなで話し合っ、その中から何か新しい解決の糸口が見つかったり、明日からの仕事に役立つことが見つかったり、明日からの暮らしに役立つようなことが見つければいいと思っています。」と挨拶がありました。



次に、国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部 高橋都部長から「がんと就労」の講演がありました。

高橋部長からは、がんや他の病気、障害、介護、子育てなど、何らかの「働きにくさ」を持っている人に対して、どうやって就労と両立させるかを考えていく時代となってきているという指摘がありました。その中でも、がんは一般的には「稀な病気」「治りにくい病気」というイメージが強いという研究データが示されました。

「がんになったご本人が職場復帰するときには、これだけ実際とかけ離れたイメージが持たれている社会の中に勇気を持って復帰していかなければならないのだということを、理解しておかなければならないと思います。」とコメントがありました。



そして、がん患者が、医療現場、職場、家庭、地域などで、自分の状況を把握し、うまく周囲に説明できるように、医療者が必要な情報提供や、状況把握の理解を促進するような働きかけをしたり、さまざまな資源も利用しながら、その情報に基づいて働く環境の設定や工夫を考えることも必要であることが指摘されました。その一方で、企業や医療者も、どのように対応したらよいか、どう関わったらよいか悩んだり困っているという現状があることも報告されました。

次に、病気となった時の納得のいく働き方についての重要な点が指摘されました。

ご本人は、自分の病状や治療のスケジュールを正確に理解して、職場に説明すること、そして、必要となる配慮を待つだけでなく積極的に引き出ししていくこと、などが重要となります。

企業側としては、がんイメージにとらわれず、その人本人の状態や状況を見ていくことや、病気や治療を理解し、本人の状況を理解して、現実的にできる対応を考えることなどが重要となります。

「がん体験者に引き続き働いてもらうことによる職場へのメリットというものもあります。配慮を受けた本人の職場への忠誠心があがるだけでなく、その同僚にもよい影響を与えます。

働くがん患者と職場の両方が納得できる方向性を見出していくことが大切だと思います。企業としては試行錯誤が必要となりますが、こうした「カフェ」のような形で、それぞれの取組みや工夫などが共有できると良いと思います」とコメントがありました。

医療者側としては、まず初診でがんの診断が出た時点で「早まって辞めないでください」と伝えることの重要性が強調されました。そして相談窓口の場所や利用の仕方を本人に教えること、本人が職場に伝えるべき治療計画や副作用などの必要情報をわかりやすく伝えること、職場、産業医との連携について指摘されました。

こうした就労支援に役立つツールとして、「がんと仕事のQ&A第2版」も紹介されました。

http://ganioho.jp/public/qa_links/brochure/cancer-work.html

患者の立場から:Aさん 女性 40歳代

Aさんは、平成21年に肺がんの手術を受けた後、平成24年に骨転移と脳転移と診断されました。現在は、仕事を休職し、月に1回通院しながら抗がん剤治療を受けています。



「体調も回復してきた中で、特に治療費や生活費について大変さを感じています。再度働くことを検討していますが、これまでの仕事は介護職で、身体介助が中心の重労働です。医師に相談した所「骨転移があるので加重による圧迫骨折の危険があり、日常生活の範囲内で腰に負担のかからない仕事を勧める」という回答でした。

そうなると、元の職場での現場復帰が難しいのですが、一見身体に問題はなさそうに見えるので、「できない」と職場に伝えづらく、また介護職の特性上、配置変更や役割変更など交渉するのも難しいです。」

と、職場に配慮を求めることの難しさを話されました。また、周囲が忙しくしている中で仕事を頼まれたら断るのは難しいこと、仕事仲間への申し訳ない気持ち、罪悪感などもあるという現状を話されました。

とはいえ、再就職についても悩まれています。

「病気が再発したり、治療や通院の日程調整が必要ですし、実際働くには体調と就労時間のバランスも考えなくてはなりません。病気や治療の告知義務がありますが、自分に不利な情報になるかもと不安です。でも伝えないと、いざというときに支援がもらえないかもしれません。病気について、どこまで伝えたらよいのかわかりません。元の職場ならリハビリ出勤などの交渉もできるかもしれませんが、別のところに就職した場合、新入社員にどこまで配慮してもらえるのか、病気への理解を示してくれるのかどうかも不安です。」

という不安についても話されました。他にも、企業の配慮義務がどこまであるのか、また仕事を辞める前に相談できる場、医療が進歩し、がん患者の生存率が上がる一方、がん患者の社会生活上の支援体制が追い付いていないと感じる現状についても話されました。

最後に、「治療を受けながら生活するがん患者にどこまでの補助があるのでしょうか。例えば健康保険についてなども、役所に相談しても安心できる回答は得られませんでした。私のようながん患者が就職を希望する場合、いったいどこに相談に行けばいいのでしょうか。情報がもらえるシステムはあるのでしょうか。この機会に何かいいアドバイスや情報が得られたらと思います。」と話を終えられました。

企業の立場から：川埜治さん(大和リース株式会社 支店長)

川埜さんの勤務される大和リース株式会社は、奈良県の社員・シャイン職場づくり推進企業(奈良県の企業の中から就業に対して働きやすい職場環境をめざしている会社)として表彰を受けたということです。がんだけに限らず、いかに働きやすい職場とするか、ということに積極的に取り組まれています。



「特に女性の場合、出産されると退職となる場合が多く、今まで身につけたスキル等がすべて無駄になってしまうという状況が多かったです。会社も給料が出せる年数は限られています、その期間休んでもらい、更にお子さんが小さいうちは時短勤務なども活用してもらっています。他にも、たとえば病気になれば会社を休みますが、一年以上になると会社として雇用ができなくなるということがあります。当社では保険会社等にもタイアップしてもらい、月々に1,000円ぐらいの掛け金で、病気になった場合に、定年時までの給与の6割程度が出るような仕組みも作っています。」

こうした積極的な取組も、実際には経費もかかることです。企業としてはどう工夫されているのでしょうか。

「職員一人あたりにかかる経費があります。時短勤務や休職となると、経費と利益のバランスを考えなくてはならなくなってきますが、色々な業種の仕事がありますので、その中で収益を生み、そこから還元していくということを会社にも認めてもらっています。収益をあげることで、いろいろな仕組みや働きやすい職場づくりへの取組にもつながっています。」とコメントがありました。

企業の立場から：西林康浩さん(奈良中央信用金庫 総務部次長)

西林さんの勤務される奈良中央信用金庫では、一時的に治療に専念する状況に置かれたとしても、「安心して戻ってきて欲しい」というメッセージを企業側が送ることの重要性について話されました。奈良県の社員・シャイン職場づくり推進企業(奈良県の企業の中から就業に対して働きやすい職場環境をめざしている会社)として表彰を受けたということです。



「まずは制度としての仕組みづくりが必要です。就業規則でいろいろなルールづくりをすることで、社員が安心して治療に専念できるという側面もありますが、それぞれ個々の事情があり、家族の状況も違い、職場の仕事内容もちがってくるので個別対応をしていくことがいちばん大切なのではないかと思います。」と、時短勤務、復職制度、配置転換など就業規則上の制度だけでなく、それを柔軟に運用できる経営者や周囲の社員の理解の必要性を強調されました。

職員同士の相互理解を促進するために、西林さんの職場では、

「まずは幹部職員からはじめていますが、月に1回、土曜日にコーチング研修をやっています。半年間の予定です。自分の言いたいことをうまく伝えるということだけでなく、部下や後輩の方がどういう思いでどういう仕事に取り組んでいるのか、それを上司がうまく引き出すにはどうしたらいいのかということについての研修です。これは職場内のコミュニケーションでも必要ですし、お客さんへの接し方にも役立てることができます。」という取り組みをはじめているそうです。

最後に、西林さんは、「ご本人には、自分が病気になって職場に不利になるのではないかという心理があると思います。忙しいので限界はあると思いますが、医療者から、『人事担当者、本人と医療者でいっしょに話をしませんか』と一言をもらえると、スムーズに進むこともあると思います。」と話を終えられました。

医師の立場から：長谷川正俊教授(奈良県立医科大学附属病院放射線治療・核医学科)

長谷川教授からは、現場でがん患者さんと向き合っている医師の立場からのお話がありました。

「特に就労支援の場合、まずは患者さんと主治医の関係が大事だと思います。実はそこがなかなかうまくいきづらい環境であるという現状もあります。そして、その次の段階として、病院の相談室や企業の職場で、実際にどうしていくかという対応をしてもらうことにつながっていきます。とはいえ、患者さん一人ひとりのがんの状況も、治療の進み方も、人生観も、価値観も違います。こうした一人ひとりの違いを考えながら、話を進めていくことが必要になります。」とコメントがありました。

このような、一人ひとりの状況をふまえながら、治療、就労、仕事のことも考えていかねばならないことを強調されました。

そして、患者さんへの支援を考えていくには、医師の経験も必要となること、医師のレベルアップや、対応する時間の必要性について話されました。

最後に、「患者さんと話をするときは、8～9割は患者さんの話をじっくりきいて、残りの1～2割は医師から話し、適切な情報を伝えていく、というのが我々の大事な役割であると思っています。」と話を終えられました。

ワールドカフェ

この後はカフェタイムです！

今回のテーマは「がんと就労についてあなたが問題だと思っていること・解決法」です。

司会進行は奈良県立医科大学附属病院 緩和ケアセンターの四宮敏章センター長です。



まずは四宮センター長から、「ワールドカフェ」の意味や手順について説明がありました。

参加者の方々は、グループに分かれ、お茶を飲みながら、話し合いです。

テーブルの上の模造紙に出た意見を書き込み、カラーペンでわかりやすくしてみたり、付箋でタイトルをつけたり…それぞれの意見やアイデアなどを視覚的にもまとめていきます。

たった1時間では足りない！と思うほど、和気あいあいと話し合いは進みました。



最後のまとめでは、各グループからは次のような発表がありました。

■会社・職場との関わり

「会社に病名を伝えることは、就労時間や就労内容の配慮のためにも、患者さん自身の身の安全という意味で必要だと思う。」

「就労規則や社会保障について、患者本人が把握しておかなくてはならない。そのために、病院や行政側からしっかりと説明をしてもらいたい。」

「会社側には、もっとがん患者のことを知ってほしい。がんであってもできる働き方もあるし、元気ながん患者もいる。がんだからと、すぐに戦力外にしてしまうのは、会社にとっても社会にとってももったいないと思う。がん患者を会社の社員研修にぜひ呼んでほしい。」

「会社側が本人理解を円滑にするためにも、本人、医療者、会社の三者で話をする機会があるといい。」

「会社によって制度も違うので、会社側が本人に説明したり対応を考えるためにも、ある程度の情報は本人から知らせてもらいたい。」

「職場にがん患者がいると、同僚としてどのように接していいのかわからない、気をつけてしまうという意見があった。同じ職場で働く人同士の情報共有や理解促進が必要だと思う。」

「職場からの考えは、がんに限らず、その人が病気を抱えていて職場に復帰する場合、患者さん本人は身体的事故を起こすリスクがあるということ、また会社としてはお客さんにリスクを与えてしまわないかという考え方、立場があるとのこと。配置転換といっても、もともとその配置される場所に働いている人がいて、他の人の配置も考えなければならないので、簡単ではないという意見があった。」

「職場の人数が少ないと、その人の状況や人となりをよく知ることができて、配慮がしやすい部分もある。」

「がん患者さんが復帰する上で、本人にはがんばらうという気持ちがあったとしてもなかなか思うように働けないということもある。徐々に身体を慣らしていくような働き方の工夫をしてもらえるといい。」

■制度や仕組みについて

「傷病手当についてご本人が知らないこともある。また、障害者手帳はなかなかとれず、病気の理解もしてもらえないし、障害者雇用も難しい、という現状がある。」

「傷病手当金のことなど、教えてくれる人はいない。どんな支援資源が利用できるのかがわかりやすくあるといい。」

■経済的な問題について

「働き盛りで生活費、住宅ローンなど抱えている時期に、がんと診断され治療費もかかり、経済的に大変になる。そうした情報をどうやって入手したらよいか、どこに聞いたらよいかもわからない。」

「生活設計に関して、ファイナンシャルプランナーなどに入ってもらい、しっかりとお金の使い道をイメージしておくこと、いざ病気になった時にはそれにもとづいて計画を詰めていかないと、なかなか大変で破綻してしまうのではないか。」

■医療者の立場から

「個人情報に関わってくるので難しい部分もあるが、患者さんの職種についてあらかじめ知っておきたい。それがよりよい就労支援にもつながると思う。」

「病棟で患者さんが仕事のことを話してもいいの心配だという意見があった。医療者側としては、話してもらえれば対策も考えられるという意見があったが、患者と医療者側で意識のずれがあるようだ。」

「医学部の4年生が医療面接…昔は問診と言っていた患者さんに症状などをきくスキルのトレーニングを行なうが、職業を尋ねる部分が疎かにされていると感じる。「お仕事をしていますか？」で終わらず、もう少し詳しく業務内容などをきくことも含めていきたい。」

■産業医について

「50人以上の従業員の会社には産業医がいるが、がんになった場合、職場復帰できるかは、主治医の判断ではなく、産業医が復職にあたっての面談を行って判断している。産業医が会社側の立場なので、なかなか相談しにくい。」

「産業医は会社側と患者側を上手につなぐ、コーディネーターの役割をしてほしい」

「積極的に産業医を活用してほしい」

「産業医にも意外に知られていないが、化学療法での投与中の副作用ではなくて、終了後に思ってもいないところが痛くなるとか、あるいは検査に出ないような後遺症が長く続くことがある。産業医に理解しておいてもらわないと、単に怠けていると誤解されてしまうので、ぜひ知っておいてほしい。」

■その他

「がんという同じ病名であっても、一人ひとりまったく違う。医療者も気づかないような心身の不調がある場合もあって、就労場面で苦勞することがある。」

「元の職場に戻ったとしても自分が給料に見合った仕事ができていると気を使ってしまう人もいる。企業側が求める所自分ができることには違いがある。気を使って退職してしまうこともある。今後、がん患者が増えていく上で、いろいろな企業でワークシェアをして、できる範囲内でみんなが仕事をすることで、仕事を継続していけるのではないか。」

「働きながらの治療ということであれば、金曜日の夜や土曜日に治療が受けられたら助かる。」

「会社と医療従事者を結ぶには患者さんを介してだけでは難しいので、MSWの役割が大きいのではないか。」

こうしたみなさんのいろいろなご意見・アイデアを伺って、最後に高橋部長からコメントがありました。

「自分が使える社会保障制度の情報の集め方については、がんと暮らしを考える会というNPOの社労士さんたちが中心につくった『がん制度ブック』も活用してもらいたいです。」

また、平日昼間以外に病院をどうやって開けるかについては、単に医療従事者の負担が増えて、安全な医療が提供できなくなったら本末転倒です。ある病院では、平日が休みで、日曜日に普通に診察をするという工夫をしているそうです。このように工夫を考えることで、もっと患者さんも、医療者側も助かる画期的な方法につながっていくと思います。

今日をきっかけに奈良県の取組みは飛躍的に進むのではないかと思います。これからはぜひ活かしたいと思います。本当にどうもありがとうございました。」

第3回ご当地カフェ「明日香カフェ」は大盛況で幕を閉じました。

明日香という歴史ある土地での開催は、今後のがんサバイバーシップの発展を後押ししてくれているようにさえ感じました。

そして、共催の奈良県立医科大学附属病院のスタッフのみなさまのご配慮とご尽力があつてこそその大成功…本当に心から感謝申し上げます。